

ヒロシマその可能性の中心。

平田剛志(美術批評) *本コンペティション審査員

経済の価値に実体がないように、歴史も時代や語り手によって変化する。ゆえに、歴史は一つではなく、正しい「歴史」などない。歴史は、個人であれ国家であれ、他者や他国との関係性によって成り立っている以上、事象に対する見方や歴史観は一樣ではないからだ。なかでも、「戦争」となると歴史観の差異は表面化しやすい。

井上裕加里は、これまで映像やパフォーマンスによって、東アジアの近現代史をめぐる歴史観の差異や集団・組織における疎外や排除など、近代社会が生み出した国家、学校、領土などのコミュニティとコミュニケーション(関係性)を演劇的なコンセプトで視覚化してきた。

本展「堆積する空気」^{註1}は、ヒロシマをテーマとした新作《罪の意識》(2017)と《文化の衝突》(2017)、東アジアの歴史をテーマにした旧作《Auld Lang Syne》(2014)の3作品が展示された。《Auld Lang Syne》については高島慈による適確なレビュー^{註2}を参照して頂くとして、以下では新作について言及したい。

《罪の意識》(2017)は、原爆ドーム前で井上が朗読をする2面プロジェクションの映像作品である。左画面では1945年8月6日に広島に原爆を投下した爆撃機エノラ・ゲイの飛行士の手紙、右画面では被爆者の証言が、加害と被害、アメリカと日本、兵士と市民という異なる立場にいた人物の言葉がモノログとして語られる。そして、発話者が井上一人であることにより、同じ声で異なる内容が語られる語りの矛盾、二律背反(アンチノミー)、ねじれを露わにしていく。

《文化の衝突》(2017)は、広島平和記念公園に設置されている原爆死没者慰霊碑(広島平和都市記念碑)に刻まれている「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから」とその英訳が書かれたシルクスクリーン作品である。「過ちは繰り返させぬ」の主語とは誰なのか、英文の主語「We」とは誰を指しているのか、さまざまな論争を呼んだ言葉である。公式には碑文の主語は「人類」とされているが、発話の主語とは誰なのか、「過ち」の主体を問う作品である。

以上2作はいずれも「ヒロシマ」をテーマとした作品だが、原爆や戦争は目に見える表面でしかない。井上は「ヒロシマ」をめぐる言葉を「読む」ことで、「まだ思惟されていないもの」^{註3}を到来させる。それは、複数の歴史を共有することではないだろうか。一つの曲や出来事という事象が異なる視点から歌われ、語られ、書かれることで、自国と他国、自己と他者、加害と被害などさまざまな差異が視覚的、聴覚的に提示され、私たちは複数の歴史に直面する。ここに特定のイデオロギーや歴史観はない。《罪の意識》の背景に映る観光客のように無意識に「歴史」を素通りするのか、あるいは言葉の前で立ち止まるのか、相違は他者の存在を意識することからしか始まらない。いま、「ヒロシマ」をその可能性の中心において読むとは、そういうことだ。

スーザン・ソントグは「文学は、単純化された声に対抗するニュアンスと矛盾の住処である。(・・)作家の職務は、多くの異なる主張、地域、経験が詰め込まれた世界を、ありのままに見る眼を育てることだ。」^{註4}と書いたが、井上の作品は単純化への抵抗である。一つの歌、一つの歴史に対して、複数の歌、声、言葉を対置し、複数の歴史を視覚化すること。本展を通じて、私たちが聞くのは、答えなき問いの可能性であった。

註1 本展の当初の公募プランは、「想像のアジア」と題した展示プランだった。だが、様々な事情でプラン変更を余儀なくされ、本展示に至った。戦後72年が経過したとはいえ、「戦争」体験をテーマとする作品制作の難しさに、「戦後」がまだ終わっていないこと痛感させる。

註2 高島慈「井上裕加里展」artscapeレビュー2015年04月15日号参照 http://artscape.jp/report/review/10109164_1735.html

註3 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』講談社(講談社学術文庫)、1990年、25頁。

註4 スーザン・ソントグ『同じ時のなかで』木幡和枝訳、NTT出版、2009年、219頁。